今昔
畫圖
續百鬼
雨
上

百鬼夜行題辭

曰維靚繪事由墨畫而生丹青焉是猶由大篆而生八分自結繩而有六經也夫書與画同厥體而倶文房之雅具也然而古之人而画古画不要厥雅焉自雅也今之人而寫古之画尤患其易俗焉耳茲用世難得其善

画至傳神妙者屬都下畫人石燕者著画譜三卷命曰百鬼夜行介詮虎告余曰願得師題言以弁之燕子余雖未識其面余與詮甫善因諾焉余時雖痁作而仗力而獲寓目乃嘆曰美哉燕子之為技一至此極耶奇則画驢惱僧逸乃誤筆成牛況此譜其

變態百體細閱一改觀逦覺一洗
多日痺熱可謂得手應心至精妙者
也余素匪知繪事若六法者雖然試
以此方古之画譜云者筆之精孔之
惟肖於是知撫子之於此藝不同庸
庸人世之精玆抜輩概見可略焉
時

安永戊戌季秋日

頑菴道人題于東都日莫里

吉祥林之穿牛觀

頑庵道人

義儀之章

それ鬼のすかた有さま始まへ文世より

つたへくるよしとものゝ本しるす歌くにしるしも

さるを人の家まで紙にうつる筆もまで字に

絵にし図又見る如鬼のすかたをおそろしく

しく牛出かるものはいまつたへいひさすとも人の

図にとらみす丑の方も有也としるす

かくしときこえたるともをとられのてうまきき

こゝろを絵かきれとかゝる繪ひくなるとめて
張の鬼あと見あつらい進いて承何かしら龍の
さうひていかもるまれりそろしうりあへとい梅
絵かい風書の林乃あるしら見いてきれの
としの一巻につらえとやち又さえ絵進い
家まうくててられそゝくるといふ声よえる山
石蕊まゐから真竜を月窗のもとあそゝまち家

今昔續百鬼巻之上

逢魔時
黄昏をいふ百魅の生ずる時なり世俗小児を外にいづる事を禁む一説に王莽時とかけりこれは王莽前漢の代を簒ひしかど程なく後漢の代となりし故昼夜のさかひを両漢の間に比してかくいふならん

鬼

世に丑寅の方を
鬼門として今鬼の
形を画くには頭に牛角
をいたゞき腰に虎皮を
まとふ是丑と寅との二つ
を合せてこの形をなせり
といへり

山精
もろこし安國縣に山鬼あり人の如くにして
一足あり伐木人のおける鹽をぬすみて石蟹
をとりくらふと
永嘉記に
見えたり

魃（ひでりがみ）

一名を旱母といふなり　剛山にすめり
その状人面にして獣身なり手足一つ
あり走る事風の如し　凡此神出る時は
旱して雨ふる事なし

水虎
水虎ハかたち小児のごとし甲ハ鯪鯉
のごとく膝頭虎の爪ニ似たり
涑水の邊ニありてつねに
沙の上ニ甲を曝すといへり

覺

飛騨美濃の深山ニ玃あり山人
呼で覺と名づく色黒く毛長くして
よく人の詞をなしよく人の意を察す
あへて人の害をなさず人これを殺さんと
すれバ先その意をさとりてにげ去と云

酒顛童子
大江山にいく世の居をむすひ人の財宝
を掠とりて積てくらゐの山のごとし
輟耕録にいはゆる鬼贓の類なりとぞ
つみき鬼の財を積しこれよき女を
あくとらせ自ら大盃をかたむけ
楽めりされどこゝハ鬢に緋の袴
きたることぞやさしき鬼の
かくれ末世に及んで
白衣の化物出ると
聖教にも
侍る
とや

橋姫
橋姫の社ハ山城の國
宇治橋にあり橋姫ハかたちいたつて醜し故に
配偶なしひとりやもめなることをうらみて人の縁辺を妬給ふと云

般若

般若ハ經の名にして苦海をわたる慈航ども しかるに嫉ある女の鬼となりしを般若面といふ 又ハ葵の上の謡に六条乃みや所の怨霊行者の經を讀誦するときゝて あらおそろしの はんにや聲や といへるより 轉じて かくハ稱せし にや

寺つゝき

物部大連守屋ハ佛法をこの
まず厩戸皇子のためにころされ
その霊一つの鳥となりて
堂塔伽藍
を毀たん
とす
これを
名づけて
てらつゝき
といふとかや

入内雀
藤原實方奥州に左遷
せられその一念雀と化し
て大内に入り臺盤所の
飯を啄しとぞ是を
入内雀と云

玉藻前

瑯邪代酔に古今事物考を引て云く 商の妲己は狐の精なりと云々 その精本朝にわたりて玉藻前となり 帝王のおそばをけがせしとかや

見ずや 淫声美色の人を惑はすの狐狸よりもはなはだし

長壁
長壁ハ古城にすむ
妖怪なり姫路に
おさかべ赤手拭とて
童もよく
しる所なり

丑時参

丑時まいりハ胸に一ツの鏡をかくし頭に三ツの燭を點し丑三つの比神社にまうで杉の梢に釘うつとかや　ねたみふかき女の嫉妬より起りて人を失ひ身をうしなふ　人を呪咀ば穴二ツ　われとふよき遁き警ならん